

ティーチング・ポートフォリオ

健康科学大学 健康科学部 リハビリテーション学科

教授 粕山 達也

1. 教育の責任

令和3年度現在において理学療法の養成校279校、定員数は14万人を超え、医療福祉系の養成校は全国的に今だに増加傾向にある。

山梨県における養成施設は本学と帝京科学大学の2校のみであり、他県と比較して養成校数は少なく、地元の学生を多く受け入れている現状ではあるが、十分な学生数を確保しているとは言い切れない状態である。県内だけでなく、関東甲信越圏内の他大学と比較して、学生から選ばれる魅力的な授業内容や学校生活を提供していく使命がある。

全国的な基礎学力の低下による理学療法士の質の低下も叫ばれる時代において、読解力や論理的思考力の低下した学生を国家試験に合格させるレベルまで学力を上げるだけでなく、社会に出た後に即戦力として働木、他者に貢献できる理学療法士を養成していく必要がある。

私は健康科学部の理学療法学科の教員として、理学療法学科の専門科目を中心に担当している。過去2年間の担当と授業科目は以下のとおりである。各授業のシラバスは健康科学大学のホームページ上で公開されている。

主要な担当科目は、運動器系及びスポーツ系領域に関する理学療法の専門科目となっている。そのほか、理学療法全般の演習、実習科目および人間発達学などの運動発達に関する科目を担当している。

2023 年度

科目名	時期		受講者
人間発達学	1年後期	必修	63名
運動器系理学療法評価学演習	3年前期	必修	70名
理学療法治療学	3年前期	必修	61名
理学療法演習Ⅲ	3年後期	必修	61名
チーム医療演習	3年後期	必修	156名
理学療法学特論	3年前期	必修	101名
総合臨床実習	4年通年	必修	90名

2024 年度

科目名	時期		受講者
健康科学論	1年後期	必修	168名
理学療法治療学	3年前期	必修	58名
理学療法演習Ⅲ	3年後期	必修	58名

チーム医療演習	3 年後期	必修	114 名
理学療法学特論	3 年前期	必修	60 名
総合臨床実習	4 年通年	必修	60 名

本学での授業の他に、以下のような活動をしている。

- 1) 健康科学大学 トレーナークラブ顧問
- 2) 日本スポーツ理学療法学会 評議員 専門会員
- 3) 日本小児理学療法学会 評議員 専門会員
- 4) 日本カヌー連盟 医科学委員会 委員 (トレーナー委員会 委員長)
- 5) 日本オリンピック委員会 医科学スタッフ
- 6) 山梨県スポーツ協会アスレティックトレーナー部会 部員
- 7) 山梨県カヌー協会 常任理事 アスレティックトレーナー
- 8) ふじざくら支援学校 学校評議員
- 9) 学生・就職・卒後教育委員会委員長
- 10) 学生募集委員

1)の活動においては、学生のスポーツ現場における対応を学び、地域貢献活動を主体としたクラブであり、実践的教育を中心にクラブ活動を行っている。トレーナーブースの運営や外部との交渉も含めて、積極的かつ主体的な学生の活動を推進している。個人の草の根的活動から開始し、部活動におけるスポーツ障害予防や運動器検診の支援などの活動を行い、高校生の運動器の実態調査とともに、理学療法の普及的活動を実践している。

2,3)の活動においては、成長期のスポーツ障害を専門的に研究活動をしているだけでなく、小学生の基本的運動能力（走る・投げる・跳ぶ・）の運動発達の縦断的研究を実施しているため、スポーツ分野と小児分野を掛け合わせて先端的な研究が外部から評価されている。こうした活動は、運動器系の授業だけでなく、人間発達学などの基礎系の分野や新カリキュラムから開始される予防理学療法などの講義においても有益な情報を提供できる。

4-7)に関しては、理学療法士としてだけでなく日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナーの資格を有していることにより、実践現場でのスポーツ理学療法の講義に活かされている。

8)については、特別支援学校の評議員を務めることにより、通常学校と特別支援学校の比較を行うことができ、健常児と障害児との比較や、近年の発達障害の動向の情報交換にも有益に働き、学生に還元することができる。

2. 教育の理念・目的

本学は、様々な総合的問題に立ち向かうことができる問題解決力を備えた人材」を養成するため、「豊かな人間力」、「専門的な知識・技術力」、「開かれた共創力」の三つの教育目標を掲げている。

理学療法教育において、専門的な知識・技術力の習得だけでなく、他者と協調しながら、主体的に行動できる人材を養成することを教育の中心に据えている。

1) 主体的に働き、他者に貢献できる理学療法士の養成

医療現場においては、周囲の状況を判断して主体的に行動することが求められるとともに、多職種と連携してチーム医療を実践できる協調性が必要となる。

主体性を発揮するためには、自らが率先して問題を発見して、個々の課題を明確にしていく作業が必要になる。教員側から与えられた情報のみを消化するだけでなく、さまざまな項目との関連性から、自らの職種が貢献できる部分を探して、対象者の問題について包括的に考えていくことが必要となってくる。

問題解決型の授業を通じて、課題の難易度を調整しながら、最適な難易度に設定していく教育的スキルを身につけつつ、学生自身の主体的な問題解決能力を向上させることが必要となる。

2) 理学療法の面白さと奥深さを分かりやすく伝える

豊かな人間力を育みながら、理学療法士が持ちうる知識と技術を使って、他者への貢献を実践できる人材を養成する。解剖学や生理学といった高校での学習では習うことのない複雑な基礎医学の知識を詰め込むだけでなく、実際の評価や治療手技の実践において「人の役に立つ」レベルのスキルに落とし込んでいくことが必要である。

臨床現場で培った知識と技術をわかりやすい形式に落とし込んで、授業を展開していく。

特に、現在の大学生はスマートフォンを使いこなし、インターネットや SNS を通じて情報を取捨選択する Z 世代とも呼ばれる世代であり、これまでの学習方法とは違った知識の定着方法を応用している。板書やパワーポイントのスライドを単純にノートに移す作業的な学習ではなく、効果的に教育アプリケーションを利用して、学生の生活スタイルに合わせた学習方法を検討していく必要がある。

3. 教育の方法

教育の機会については、講義だけでなく、学内外の活動も含めて、あらゆる形式で展開していくことが可能である。

授業開始及び終了時の基本的な挨拶や身だしなみを徹底させ、普段の生活態度につい

でも指導していく。クラブやサークル活動についても、積極的な参加を促し、人的交流についても重要な教育的要素であることを意識づけしていく。

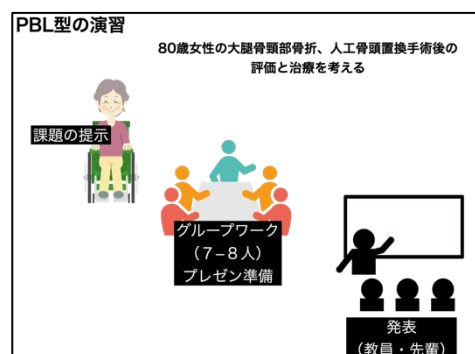
・問題解決型授業

理学療法演習Ⅲ-1 の授業においては、PBL（Problem Based Learning:問題解決型学習）を導入している。

整形外科疾患及び脳神経障害を中心とする症例を課題として取り上げ、基本的な理学療法の評価から治療の流れを推論していく。グループワークによって、個々が調べた情報を整理して、最終的にはパワーポイントによるプレゼンテーションを実施する。

情報収集や課題の整理において教員や先輩方がファシリテーション役となって、グループディスカッションを促す。答えを漠然と提示するのではなく、必要な情報を促し、情報との関連

について、ヒントを与えて、考える力を養う。グループワークの過程において、勉強量・作業量の個人差が生じ、人間関係が悪化したり、十分な課題解決が行えなかったりするなどの問題が生じる場面がみられるが、能力差のある集団をどのようにまとめていくか実践的な協調性を高めるプログラムとしている。学生からの批判的なコメントもみられるが、その反面「難しいけど、勉強になった」とのコメントもみられ、ファシリテーション技術を向上させ、課題の難易度やグループ発表の方法などを調整しながら、適切な課題設定を心がけている。



・現場に即した実践的授業

理学療法の専門科目の特性上、実技指導の割合が高くなる。運動器系理学療法の評価学演習や実習などの科目については、教科書の知識を臨床経験に即して情報を噛み砕いて分かりやすく指導している。具体的には、臨床で見ていた症例像の動画を活用して臨床思考過程を学習したり、テーピングや疼痛除去に関する徒手的な治療技術を目の前でみせたりすることにより、身体を変化させることができる理学療法士の凄さを体験してもらう。

また、テーピング等は実際に応急処置ができるレベルにまで習得することを目標として、人数分のテーピングを用意するなど学習環境を整えている。

・ Teams を活用した授業の工夫

Microsoft の Teams が導入され、部分的に遠隔教育が開始となった。Teams の機能を利用したオンラインでの講義に加えて、講義の復習課題については Forms 機能を活用してクイズ形式で復習を図った。また、スマートフォンを利用した画像等の提出も可能であるため、運動器系の科目や治療学の講義課題においてテーピングの完成図を写真に撮り、課題として添付して提出することにより、視覚だけでの即時的な評価ではなく、出来栄を客観的に評価できる仕組みを作ることができた。



4. 教育の成果・評価

FD 委員会によって実施されている授業評価アンケートを活用して、授業内容の反省点を振り返り、改善に活かすことができる。また、実際の授業内容についても、項目毎に分析を行い、コメントの内容とともに、次年度のシラバスや授業内容に活かしている。

・ 理学療法演習Ⅲ

問題解決型の演習スタイルをとっており、理学療法における症例基盤型学習（Case-Based Learning: CBL）は、臨床現場に即した実践的な学習方法として注目されている。学生は、実際の症例を想定した課題に対して主体的に情報を収集・分析し、グループディスカッションを通じて問題解決を図る。この過程により、単なる知識の習得にとどまらず、臨床推論能力や判断力、コミュニケーション能力の向上が期待される。また、学習内容が具体的かつ臨床的であることから、学習意欲の向上や臨床実習への不安軽減といった心理的効果も報告されている。一方で、CBL にはいくつかの課題も存在する。症例に対する正解が一つに定まらないため、学習の方向性に迷いが生じやすく、また基礎的な知識の習得が不十分な場合には、議論への参加が困難となることがある。さらに、予習・復習に多くの時間を要することや、学習成果が学生の主体性に大きく依存する点も指摘されている。これらの点を踏まえ、CBL を効果的に活用するためには、学生の基礎学力を前提とした適切な症例設計と、教員によるファシリテーションが不可欠である。以上のように、症例基盤型学習は理学療法教育において有効性が高い一方で、その運用にあたっては慎重な配慮が求められる。

また、各演習課題については、課題への取り組み方や情報の整理の方法について、提示してある程度の道筋を示すことにより自主的な学習を促すように取り組んだ。

・ 運動器系理学療法評価学演習

自分の専門分野である運動器系理学療法学の講義では、実際の現場での症例を動画で提示するだけでなく、さまざまなツールを利用して、臨床思考過程が形成できるように講義ないで工夫を行った。

使用する教科書においても工夫しており、学生が教科書を購入する上で、分かりやすさと同時に実際に実習や臨床現場に出ても使いやすい教科書であることが重要であると考えた。また、授業においては、配布資料に依存して、教科書の活用が不十分な場合に学生から不満が生じるケースが散見される。分かりやすく使いやすい教科書をもとに、指導内容の実態にあった教科書の活用が重要である。教科書の内容だけでなく、臨床場面での例えを交えて、個人的な体験に基づくオリジナルな学習内容を盛り込みながら、興味を引く構成にするように心がけた。

また、実習場面で使用する専門用語についても、シミュレーション形式で問答しながら使用方法を提示するなど、学生が実習に出た際に戸惑うことがないように分かりやすい説明を心がけた。「とても分かりやすい」「実習に役立つ豆知識が役立った」などの好意的な反応が得られた。

・ チーム医療演習

チーム医療演習の最大のメリットは、多職種が連携して一人の対象者に対する支援を考える体験を通じて、実践的な協働の重要性を理解できる点である。理学療法、作業療法、看護、福祉など異なる専門性を持つ学生が意見を交わすことで、自分にはない視点や考え方を知る機会となり、将来の臨床におけるチーム医療の基礎を築くことができる。また、コミュニケーション能力や役割分担、他者への理解を深める力が養われる点も大きな利点である。学生のうちから職種間の連携を意識した演習を行うことで、将来の医療現場で円滑にチームの一員として行動できる力を育むことができる。

本講義に対しては、チーム医療の重要性や多職種連携の視点を学ぶ貴重な機会として評価する意見が多く見られた。特に他学科との交流や実践的な学びが新鮮で楽しかったという声や、将来の医療現場を見据えた有意義な経験であったという意見があった。一方で、発表形式に関してはポスターより PowerPointの方が柔軟に修正ができるとの指摘があり、グループワークでは知識差や学科間の不平等さを感じたという声も多くあった。福祉心理専攻の学生からは、内容の専門性が高すぎて参加しづらかった、評価が不平等だとする強い不満も見られた。また、実施時期や期間についても国家試験前の実施や短期間での実施に対する否定的な意見が多く、より適切な時期と時間配分への改善が求められた。

5. 今後の目標

短期目標：授業評価内容の改善、専門的な学会及び課外活動の充実

半期毎の授業評価の内容を項目毎に吟味して、改善できる内容については着実に変更していく。毎年同じ授業資料を使用して、同じ内容を実施することで業務負担が減り、効率化が図られる一方で、時代によって変化する学生の学習スタイルや授業内容に合わない状況が出てくる。常に、教員が学び改善していく姿勢を示していくことが必要である。

運動器・スポーツ分野に関する専門的な知識や技術については、常に新しい情報を仕入れ、ブラッシュアップしていくことが必要である。学外の研究者やトレーナーと定期的な交流を図りながら、時代の潮流を捉えて学生に伝えていくことが必要である。また、実際にトレーナー活動や学校保健活動を行うことで、子どもたちの運動能力の変化や身体特性を把握して、治療に活かしていくことも必要になってくる。

長期目標：地域及び世界で活躍する理学療法士の養成

本学は地域に根ざした実践教育を展開する上で、整った環境にある。教員自らが理学療法士としての知識・技術を身につけていくだけでなく、研究活動や地域貢献活動を通じて、地域の医療に還元できる人材として活動していくことが重要である。

学生が憧れる存在として自らを律して、地域及び世界で活躍できる理学療法士を養成していくことを目指す。